FUTUER EVENT 春の企画展

WITHOUT THOUGHT '99—'03 特別展

会　　場：名古屋芸術大学アート&デザインセンター
会　　期：2003年5月24日(土)➔ 6月11日(水)
開館時間：12:00 ➔ 18:00 (日曜 休館)

「WITHOUT THOUGHT」つまり「考えない」デザインは、人々が生活の中で無意識に汲み取っている何かを、直感的に伝えます。だから人は、使っているうちにある時ふとそのデザインに気づくのです。「あ、そうだよね!」と。「WITHOUT THOUGHT」のデザイナーたちは人間の生活を見つめなおし、今まで気づかなかった何かをそこに見出し、必然のデザインを発見するのです。

分野や文化の異なる企業に所属するデザイナーが、「WITHOUT THOUGHT」というデザインアプローチを共有して作り出した作品は、日本はもとより、海外でも大きな反響を呼び、日本が発信するデザインプロジェクトとして注目されています。1999年のWITHOUT THOUGHTでは、自分が所属する企業ブランドの製品になるようなプロダクトを、2000年のWITHOUT THOUGHT 2では、通勤電車の「つり革」を、2001年のWITHOUT THOUGHT 3では、「e-fashion」デザインしました。そして2003年2月にWITHOUT THOUGHT 4が提案したのは、実用的にしてアートでもあるプロダクト。本展では、初めての試みとして、第1回から第4回の全作品写真とプロトタイプモデルを展示いたします。また、会期中、深澤直人氏をお招きし、レクチャーやワークショップ、レセプションなどを予定しています。

WITHOUT THOUGHT:
DMN(ダイヤモンド・デザインマネジメントネットワーク)機構に所属する企業デザイナーたちとインダストリアルデザイナー深澤直人の共同企画によるデザインプロジェクトです。深澤直人が全体構想とデザインをディレクションし、メンバーは、相互に触発しあい創造性を継続させながら、デザインレビューやブレインストーミングを経て、2ヶ月余りの期間でプロトタイプモデルを制作し、WITHOUT THOUGHT展を開催しています。

深澤直人 氏

主催　名古屋芸術大学デザイン学部／アート&デザインセンター
協賛　(株)国際デザインセンター
後援　名古屋芸術大学後援会
協力　ダイヤモンド・デザイン・マネジメント・ネットワーク(DMN)機構
　　(株)セントラルグラフィックセンター

ワークショップ・プレゼンテーションのご案内(要申込み)

Part1:　深澤直人デザインワークショップ+レクチャー+レセプション
会場:名古屋芸術大学
5月24日(土)
ワークショップ　10:00－12:00　X棟2F
レクチャー　13:30－15:30　B棟講議室
レセプション　16:30－18:30　B棟食堂

Part 2:　プレゼンテーション
会場:ナディアパーク デザインセンタービル6F プレゼンテーションルーム)
5月31日(土)　13:00－16:30

申込締切　2003年5月14日(水)※ただし定員になり次第締切
お問合せ　名古屋芸術大学デザイン学部　インダストリアルデザイン研究室
TEL・FAX :0568-26-0182

EXHIBITION 5➔7月　アート&デザインセンター 展覧会スケジュール

『幼稚園児たちのゲイジツ』展	5月 9日(金)～ 5月15日(木)	BE+be他
ここちよいよい展	5月16日(金)～ 5月21日(水)	be
春の企画展『WITHOUT THOUGHT1-4』招待展	5月24日(土)～ 6月12日(木)	BE+be
デンマークの作家たち -公開制作-	5月24日(土)～ 6月13日(金)	Studio 1
デンマークの作家たち ～Lis Gram&Marianne Fossgreen～展	6月14日(土)～ 6月26日(木)	BE
After Remisen～小品展	6月14日(土)～ 6月26日(木)	be
素材の怪物。展　デザイン科 クラフトブロック	6月27日(金)～ 7月 3日(木)	BE+be他
名古屋芸術大学 留学生作品展	7月 4日(金)～ 7月10日(木)	BE+be他
ex.展　洋画コース 絵画・造形選択コース3年選抜	7月11日(金)～ 7月17日(木)	BE+be他
—絵画とイラストレーションの関係展— 松本圭以子とマツモトヨーコ	7月18日(金)～ 7月31日(木)	BE+be

Open 12:00－18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝祭日休館　【入場無料】どなたでもご覧いただけます。

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県西春日井郡西春町 tel.0568-24-0325 fax.0568-24-0326

交通のご利用
●最寄りの交通機関をご利用の場合名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重駅下車西へ約1,000m徒歩15分。
※急行電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください。西春駅から北西2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります。
●自動車ご利用の場合
一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。名古屋空港から10分

Steering committee MEMBER

H15年度 アート&デザインセンター運営委員会メンバー

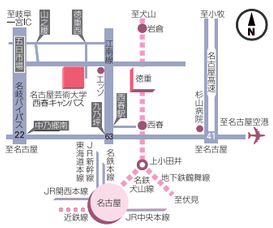
センター長	神戸　峰男
委員長	高橋　綾子
副委員長	藤松　由美
	津田　佳紀
委員	岩井　義尚
	須田　真弘
	池側　隆之
学芸スタッフ	江坂恵里子

○ 編集後記

『B!e』というタイトルにはセンター機能が象徴されています。ギャラリーBEとbeの間に『!(surprise)』を加えました。是非、この『!』という感覚を大事にしたセンターにしたいものです。「開く」というコンセプトで改修されたB棟を、展覧会やワークショップを行う知的な刺激の空間、そしてラウンジ・スペースを憩いの場として活用して頂きたいと思います。皆さんからのご意見、ご要望をお待ちしています。　(江坂)

B!e 創刊号 Vol.1
発行日　2003年5月15日
編集・発行　名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535　愛知県西春日井郡西春町
Tel. 0568-24-3025　Fax. 0568-24-3026
URL　http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人(サンメッセ株式会社)
印刷　サンメッセ株式会社

2003　Printed in Japan
© Nagoya University of Arts, Art & Design Center



旧絵画棟B棟

THE FIRST ISSUE

B!e

SPRING 2003 Vol. 1【創刊号】
ART & DESIGN CENTER NEWS

特集 FRAMED・・・・1　始動した『アート&デザインセンター』

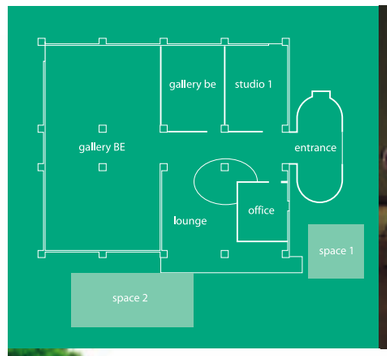
ART & DESIGN CENTER

アート&デザインセンターのあるB棟は30年間にわたって絵画棟でした。
1998年、新洋画棟の完成に伴ってB棟の大改修が始まります。B棟を大学全体で利用する文化・厚生施設として再開発する計画でした。

どんな施設に生まれ変わらせるのか?
「施設利用特別委員会」を設置し広くアンケート調査をして要望を募りました。改修計画には積極的に学生たちのアイデアも取り入れられました。そして最終的に選ばれたのが学内の中央の場所にふさわしい誰もが利用出来る文化コンプレックスです。

B棟は、PH STUDIOの設計で外光を取り入れた明るい空間に生まれ変わりました。『食堂』『図書館』『大講義室』そして『アート&デザインセンター』。アート&デザインセンターにはギャラリーBE&be、レジデンス制作スタジオ、常設展示のスペースも備えたラウンジ・スペースなどの機能が揃いました。学内だけでなく社会にも開かれた教育文化施設が誕生したのです。

2001年、美術文化学科の開設とも連動して、あらためてハードにふさわしい『アート&デザインセンター』のありかたについて検討が重ねられました。



ラウンジ

現在のB棟(アート&デザインセンター)

『大学内の独立した組織として教育、研究の向上と共に、社会の芸術文化活動の発展に寄与する』

2003年4月
アート&デザインセンターは、学内外の文化情報の収集・発信空間であると同時に、社会に開かれた教育文化施設として新たにスタートしたのです。

『B!e』創刊によせて

センター長　神戸 峰男(美術学部長)

今日の混沌とした社会情勢の中で、芸術文化をとりまく環境もまたそれとは無縁であるはずがありません。さらには、危機の時代であるからこそ、芸術文化の重要性があらためて見直されるべきでしょう。そうした中で、美術・デザインというジャンルから、新たな価値観を提案できる、つまり芸術を通して社会に貢献できる人材を育成するのが芸術大学の使命といえます。

名古屋芸術大学のおける「アート&デザインセンター」とは、美術・デザイン教育の実験と成果を問う場であるとともに、大学が社会と接する“開かれた扉”であると考えます。ですから地域の教育文化施設としての機能も果たすべく、今後ますます多岐にわたる活動を展開していく所存です。

平成15年度の春を迎え、このたびセンターにかかわる学内組織が発足し、その機関誌として本誌『B!e』を創刊することとなりました。この媒体もまた、ギャラリーと同様、ひろく学内外の皆さまに、様々な芸術文化情報を発信していくものです。学内にとどまらない題材を得て、鋭意魅力ある誌面づくりに努めてまいります。「アート&デザインセンター」と皆さんとを介する媒体として、どうか今後ともご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

特集 TALK・・・・2

創刊記念鼎談

『大学ギャラリーの可能性』

—アート&デザインセンターからの発信—

西村　正幸（美術学部　版画選択コース）
高橋　綾子（美術学部　美術文化学科）
江坂恵里子（アート&デザインセンター）

ギャラリー誕生。待ち望んでいたスペース

江坂（以下Ⓔ）：まず西村先生にギャラリーの立ち上げ経緯を伺いたいのですが。

西村（以下Ⓝ）：僕が15年くらい前に着任した頃から、何人かの教員からギャラリー開設の願望は聞いていました。当時はまったく現実味のない話でしたが、学生たちの作品を発表する機会と、学外からのアーティストを呼んで学生だけでなく教員にも波及する刺激と学習効果の場が必要だと言われていました。やっと今から5年前にB棟の改修工事が決まり、その場を学生が集まる場にするという合意事項が出来たんですね。こうしてB棟は食堂、図書館とギャラリーになりました。ただ、オープニング展以降、展覧会がなかなか続かない時期があったものの、関心とやる気のある教員たちが中心のギャラリー運営委員会が頻繁にミーティングを重ね、2000年には、春の企画展として『北山善夫展』を開催することができました。

高橋（以下Ⓣ）：見応えのある新作展でしたね。実際に大学では、モノ創りを教えてはいるものの、いかに展示するかということにあまり力を入れてこなかったのではないでしょうか。

どうプレゼンテーションするのかを教育する場

Ⓝ：やはり、やりっ放しは駄目だと思う。教育の一貫として、学生にはどう自分の作品をプレゼンテーションするのかを教育すべきです。“仲良し展”ではいけない。ちゃんとプロデュースしないと、学生主体という意味を履き違えないこと。勘違いして欲しくないのは、タダでやれるからという安易な気持ちで、ここを使うべきではないですね。場所はタダでもきちんとしたDMやチラシなどを作って、しかるべき方面に広報する。その為には、お金を集めることも必要かも知れない。たとえ学生の展覧会・作品であっても、対外的にきちんと対応することが大切。本当の現場を体験させる。見せることは見る人を意識すること、それによって作品の質も上がって来ますね。ギャラリーはそういう場であると思う。

Ⓔ：そうですね。勘違いされがちですが、学生主体というのは好き勝手ではなく、学生が展示方法だけでなく、広報の方法から学ぶというのは素晴らしいと思います。社会に対して自分の作品を発表することを一つのプロジェクトとしてとらえて、PRする為に何が重要で何が欠けているのかを体験するために自ら広報活動に出向くことも必要でしょうね。

「出来事としての美術」-川俣正と藤浩志-　2001年

Ⓝ：それともう一つ、外部の作家を招いた時に学生に手伝わせるのは、すごく勉強になる。空間の使い方、展示の仕方、作品の扱い方などを実際に見ることによって学べること、身につくことがとても多いでしょう。

Ⓔ：2年前に美術文化学科が発足して、何か変わりましたか?

Ⓝ：美術文化学科に対しての期待は大きいと思う。数年後には、美術文化学科の学生が、他の学部の学生の展覧会を企画することもできるわけだし。

Ⓣ：美術文化学科の学生たちが練習場としてギャラリーをどう使うかという問題もそうですが、私たちはもっと観るということに積極的にならないといけない。作家には創る喜び、展示する喜びがありますが、観るという喜びを持っていない作家はつまらないな、と思うのです。ギャラリーは、この2～3年間スペースとしては予定が埋まっているですが、展覧会場というだけでなく、そこが学生たちの待ち合わせ場所になるとか、いわゆる大学の中核的なスペースには未だなっていないですよね。そういう吸引力が、ちょっと足りない。

Ⓔ：何かが欠けているということでしょうか。

情報発信の場としてのアート&デザインセンター

Ⓣ：でも、この4月にアート&デザインセンターが独立した組織になりましたね。常に最新の情報や、気に留まったことを専任スタッフが介在して発信するということだけでもすごく変わると思う。空間的な魅力だけでなく、ギャラリーに行けば何かがあるっていうことね。ここは外光も感じられて、天気が良ければ文庫本でも持ってここで読みたいと思わせたいな。

Ⓝ：ここからどう発信するか、どう見せるかも大切もですが、僕は高橋さんがさっき言ったことが、気になります。自分の作品は一生懸命つくるけど、人の作品をちゃんと見ていないことが多くなっているような気がしてきてね。多分、昔の芸大生よりは人の作品をちゃんと見てないし、見ようとも思っていないんじゃないかな。だから、ここに作品があっても見に来ないのかも知れない。これからの課題だと思います。大して見たり知りもしないで、自分の好みを絞り込みすぎる。見ることにもっと積極的になって欲しい。探究心を持って接すれば、いくらでも得るものはある筈です。

Ⓣ：見せる側は、いかに作品をプレゼンテーションするかということに意識的であってほしい。そして外に向けてこのスペースの良さを知らせるのは、我々の役目ですね。

地域との関わり

Ⓝ：近年、美術館でも集客が問われていますが、何年か前に京都の精華大学のギャラリー　フロール[1]で棟方志功の展覧会を見ましたが、すごい人でした。新聞社も関わっていましてね。確かに地域の人に魅力を与えるというのは大事ですが、少し複雑な気持ちでした。勿論、地域の人に対してのサービスは大切だし、大学の役割でもあると思う。この間の入学式で西春町長が挨拶されたように、ここに芸大があるのは町の活性化に繋がると期待されている。

Ⓣ：町長は地域の付加価値に、芸大を一つの資源と考えて、彫刻がたくさんある町づくりをしたい、それには芸大があってこそという話をされました。方法はともあれ行政のトップが大学は資源だと考えることは非常に重要なことです。それに対して、こちらが何を提案できるかが問われる。例えば東京芸大取手校でやっている『取手リ・サイクリング　アートプロジェクト』[2]。それは駅前広場の都市計画整備の記念事業で、取手市の行政サイドは、東京芸大はトップの芸大だし、そこの先生方に彫刻を作っても貰えば良いのではないかという考え方だったようです。しかし大学の新しい学科（先端芸術表現科）が中心となって、市民参加型のアートプロジェクトを展開させています。大学側もただお膳立てに乗るのではなく、意見が交換できる関係にしなくてはいけない。だから西春町の町長の“芸大は資源だ”という見方はとても大切に思えます。

オープン・ザ・ドア

Ⓔ：そうですね。私たちが先ず出来ることは地域に向かってドアを開ける事だと思います。集客力のある企画も大事かも知れませんが、私たちなりの何か有効なプレゼンテーションがあるはずですね。年2回の企画展とは別に定期的な展覧会枠をつくってシリーズ化するとか、N/N（エヌツー）[3]のようなプロジェクトとか。大学と地域との関わりかたは双方向が大切ですよね。このセンターが色んな可能性を生み出すきっかけになれると思います。ただ、ドアは開かれてなきゃいけません。

作家の顔と先生の顔

Ⓣ：さらに、教員の展覧会枠は必要だと思いますね。

Ⓝ：僕は非常勤の先生の作家としての魅力を学生たちに提示したいと思って“版の方法論”という展覧会とワークショップや対談を組み合わせるシリーズをここでやってきました。僕自身学生の頃、非常勤の先生方にわくわくしていたしね。でも学生には一生懸命アドバイスしてくれる『先生』でしかない。「この人はすごい作家だぞ」と言っても作品を見ていないので分からない。このシリーズをやることで、作家としての姿を学生が見て、その先生の見方が急激に変わって来た。これは大事だと思った。

Ⓔ：そう言う意味では、このセンターにはワークショップも出来るレジデンス制作スタジオもあります。

Ⓝ：ギャラリーだけではなくてスタジオスペースも活用して欲しいですね。いつもここで誰かが公開制作をしているということになると素晴らしいなと思います。

Ⓣ：芸術大学の先生は教師でもあり作家でもある。たぶん8割がたは教師として学生と接しておられますが、作家としての側面を見せることや、外部のゲスト・アーティストの参加はとても重要です。その人自身がまるごと作家という人の作品や、いるだけで影響を与えられるという人をピンポイントで見せていくのが大切でしょうね。

センター機能

Ⓔ：空間自体の力はありますしプラスアルファが大切ということですね。それがアーティスト・イン・レジデンスや、ラウンジの活用に繋がっていく。

Ⓝ：そう、やはりセンターからの情報発信、ラウンジに行けば何か新しい情報があるというね。また、地域の子どもたちと親や先生に開かれた場を提供することで、美術教育の底上げの魅力づくりも出来るのではないかと思いますね。

Ⓔ：子どもたちや保護者だけでなく、その先生たちにも参加して貰うと良いですね。月に1回とか2ヶ月に1回くらい、地域の学校の先生方に向けた現代美術のレクチャーを実施して欲しいですね。どう考えても、説明の出来ない展示／場所に先生たちは生徒を引率して来てくれるとは思えません。先ずはこの地域だけでも、せめて、春と秋の大学企画展の前に展覧会の概略と見どころを伝える試みがあっても良いのではないかと思います。

Ⓣ：この場所でこそ出来ることを、着実にやって行くということですね。

Ⓔ：その一つの契機としてこの『Ble』も、アート&デザインセンターからのニュース・お知らせになればと願っているのですが・・・。

Ⓣ：センター機能のひとつとしてギャラリー空間が位置付けられて、そこを軸に将来的には、外に向けての研究所的な役割を担うようになって欲しいと思っています。

Ⓔ：アート&デザインセンター全体に機能を持たせ、いろんな声をとりまとめて行く場所、つまりソフトのブランディングを考える場所ですね。ここは公共の施設ではないけれど、それに近い位置付けだと思います。また、独立したニュートラルなスペースを持っているということで、フットワークの軽いPRをしていくことも重要です。話は尽きませんが、まずは大学としてセンターとして、社会との繋がりを大切にしながら、普遍的なものを提供して行きたいですね。

［鼎談を終えて］
ギャラリーでの展覧会企画を数多くされている西村先生、アート&デザインセンター運営委員会委員長の高橋先生、そして4月からセンターの学芸スタッフとなりました江坂が、今後のセンター運営への抱負を述べました。話は時に白熱し、重要なエピソードも多く、時間の経つのを忘れました。今回、残念ながら誌面の都合でご紹介できなかった内外の卒業展のあり方については、いずれ機会を改めて取り上げてみたいと思います。（Ⓔ）

NOTES

1.ギャラリー　フロール
ギャラリーフロールは京都精華大学情報館の博物館部門が運営する大学ギャラリーです。1997年10月に開館し、1999年3月には博物館相当施設の指定を受けました。活動は資料の収集・保存、展覧会の開催、調査研究を中心とし、学芸員実習の受け入れなどの教育活動等、多岐にわたっています。
展覧会は大学主催の企画展と、在学生・卒業生・教職員などの大学関係者による申請展とがあり、年平均12回の展覧会を開催し、学内のみならず広く一般に公開しています。
http://www.kyoto-seika.ac.jp/fleur/index.html

2.「取手アートプロジェクト」
1999年、東京芸術大学取手校地に先端芸術表現科が展開したことを機に、取手市、先端芸術表現科、市民、地元企業等が一体となって、継続的に進めている文化事業です。
基本方針として、公募による野外アート展「取手リ・サイクリングアートプロジェクト」と 取手在住作家等に諮問uオープンスタジオ」を核として、これらを毎年交代で開催することになっています。
http://www.toride-ap.gr.jp/

3.N/N（エヌツー）
3頁にも紹介されている西春駅前の空き店舗を利用した町と大学の交流事業です。名古屋芸大のNと西春町のNを併せてN/N（エヌツー）と命名されました。
http://www5.ocn.ne.jp/~n2online/index2.html

トピックス TOPICS レポート

出前卒展『今、出ましたから。』

2003年3月8日～3月16日
佐久島にて

「名古屋芸大」の暖簾から、とびきりの笑顔をのぞかせてくれたのは、平成14年度卒業生の横内奈津実さん。彼女は、「芸術計画演習」という授業で企画したプロジェクト「出前卒展」の実行委員長である。卒業間際ではあったが、実践部隊として名乗りをあげた有志21人が、三河湾に浮かぶ佐久島に、卒業制作作品を運んで展覧会を開催したのであった。

作品搬入作業は、3月7日。大学からトラックで輸送し、一色町の渡船場でチャーター船に積み込む。この日は、朝からなんと定期便が風雨で欠航するほどの悪天候。よりによって、どうして。。。とずぶ濡れになって焦る一同でしたが、お昼に風が少しおさまって、いざ出陣!島の世話役のみなさんが、ほんとうに親身にサポートをしてくださった。こうして会場となった「弁天サロン」の和室と、「漁具倉庫」に並んだ作品たちは、県美術館ギャラリーにあった様子とは、また違った表情を見せている。学生たちも、自分の作品だけでなく、展示空間全体への配慮を心得ていた。

会期中には、島のみなさんへのお礼の意も込めて、いまや人気ブレイク中の神田山陽さんの講談をお寺で開催。話芸の粋!とにかくおじいちゃん、おばあちゃんの笑い声と笑顔が最後まで絶えなかった。お見送りは紙コップの灯籠を400個ほど境内の芝生に敷き詰め、さすが芸大生!とお褒めをいただいた。民宿では片山宏先生（前美術学部長）の講話と山陽さんも交えての交流会で夜は更けた。

学生たちは、自分の作品と自身が島のみなさんに受け入れられたこと、そして率直な感想を聞けたこと、それぞれに手ごたえを感じていたようだった。私自身は、島のみなさんの好意と期待に支えられて、リアルに学生と接することができたことに感謝!今だに心が熱くなっている。

美術学部 美術文化学科　　高橋綾子

庄司達「Cloth-Behind・FORUM」フォーラムの園

2003年3月14日～4月13日
東京国際フォーラム　アートショップ　エキシビションスペース

私の最近の個展のテーマにはBehind（背後）という言葉を選んでいます。2000年には強く張った布の長い壁の前方と背後を強調する演出をしました。2001年には和室内のタタミの上に敷いた布の上の空間と布の下のタタミの背後までを予想させる展示をしました。2002年のブライトン大学ギャラリーでは隣接するにぎやかな街路とギャラリースペースの間に、切り抜いた孔の並ぶ布のカーテンを降ろして、双方の空間を同時に想像するように配慮しました。

今回、東京国際フォーラム内のギャラリースペースのフローリングの床に着目しました。カエデ材の羽目板の上、一面に敷きつめたオレンジ布の一部が上に突き上げられて立ち上る光景をイメージし、いくつかの羽目板が山型になるインスタレーションを行いました。

立ち上った板と布の下に現われた床の上に椿などの木の実を置いて、床面がもしかしたら地面に思えるかもしれないと考えました。

布の上を歩いて散歩してくれた人々に、立ち上った板と布の隙間に現われた床面の背後、中庭へそして東京-日本へと、想像が続くことを期待しました。

美術学部 造形科　　庄司達

瀬田哲司／EXPOSION á DEJION

2003年3月
St. Bénigne大聖堂地下聖堂

私は3月2日から26日まで名古屋芸大との姉妹校であるフランスのエコール.デ.ボザール.デ.ディジョンに滞在し、交換展として個展を開いてきました。今回はその展覧会の内容を紹介したいと思います。個展の会場となった St. Bénigne大聖堂地下聖堂は1007年建立の由緒ある建造物でロマネスク様式の円柱に支えられた広大な地下空間は非常に趣きのある特異な空間です。作品は写真をつかったインスタレーションで、基本的には日本でプリントまでしてそれを現地で組み立ててインスタレーション作品にするという手法をとりました。出品作品は全部で5点ですが、そのなかの1点を紹介します。

la prairie　　床にハーフサイズで撮影した草むらの写真を密着焼きでプリント。それを一枚ずつ切り離し、地下聖堂の床に敷いていく。約8000枚の小さな写真で地下聖堂の床が覆われました。

今回の展示は時間、予算など非常に厳しい条件でしたが、ディジョンの新聞にレビュー記事が掲載されるなど強い反響がありました。この経験は私に自信と今後の展望を与えてくれたと思います。

最後に展覧会の開催に尽力していただいた。ボザール.デ.ディジョンのムッシュウ.フランソワ,ディスマンと協力していただいたSt. Bénigne教会の関係者の方々に感謝の意を表します。また両校の交流がより活発に発展していくことを期待します。

デザイン学部　　瀬田哲司

新　中古生活／西春町

2003年4月5日～13日
N/N（エヌツー）

大学のある西春町、その中心市街地活性化に向けて、町と大学の交流事業が、昨年からスタートした。駅前の空き店舗を利用したこの共同プロジェクト、作品や商品が並んだり、作品の制作の場所となったり、デザイン事務所として機能したり、時には24時間フル稼働している。1年前には何もなかった空間が、商店街や町の人々の協力もあり、さまざまな人が出入りする所となった。エヌツーは、西春のNと名古屋芸大のNを2つ合わせたものである。社会に開かれた大学として、学生、卒業生が社会へ向けての情報発信の場としても利用され始めた。この4月には、4年生が残していったものを格安でリサイクルする「新　中古生活」を提案し、ほぼ完売した。今年も、さまざまな企画で、町と大学にエネルギーを注射予定。

エヌツー責任者　デザイン学部　　平田哲生

RELAY ESSAY

ハーレムの美術館

藤松 由美

激しいスノーストームで着陸までに二時間余を旋回し続けていた飛行機が三度のバウンドの後、どうにか停止し、無事を喜び合いながらラガーディア空港に降り立った。渦巻く吹雪の中で小一時間も並び、相乗りタクシーでホテルに着いたのは日付が変わる頃となっていた。翌日から始まったアメリカ文学会に出席した後、お願いしてあったコロンビア大学の図書館での資料収集と確認作業の目途がたった新年四日の午後、ハーレムのスタジオ・ミュージアムを訪ねた。

二年前の後期に英語教材として学生たちと読んだ「アート・ニューズ」誌（2000年5月）の記事でその存在を知った美術館である。地域住民の寄付とボランティアで運営される美術館はコロンビア大学の裏門から歩いて半時間ほどの125ストリートに面し、アポロ劇場から数ブロックの繁華街に位置していた。古いビルを改修し、1968年の設立から一貫してアフリカ系アメリカ人であるため見過ごされてきた美術作家の発表の拠点として機能してきた。

PASSAGES: THE STUDIO MUSEUM IN HARLEMより

メトロポリタン美術館で唯一の黒人学芸員であったL.シムズが、彼女の転身を惜しむ声のある中、2000年初頭から指揮にあたっている。「二十一世紀に生きるアフリカ系アメリカ人の女性として自分自身を見詰め直す機会を展示作品が与えてくれる。ハーレムに生きる人々にとって、この美術館の存在意義は計り知れない」と語る館長の夢は拡張工事の一日も早い完成とのことであった。館内で働く若者たちの誇りに満ちた、生きいきとした対応には館長の夢をさらに発展させるエネルギーが満ちあふれていた。

デザイン学部教養部会　教授（米文学）